美しき死の岸に

原民喜

何かうっとりさせるような生温かい底に不思議に冷気を含んだ空気が、彼の頬(ほお)に触れては動いてゆくようだった。図書館の窓からこちらへ流れてくる気流なのだが、凝(じっ)と頬をその風にあてていると、魂は魅せられたように彼は何を考えるともなく思い耽(ふけ)っているのだった。一秒、一秒の静かな光線の足どりがここに立ちどまって、一秒、一秒のひそやかな空気がむこうから流れてくる。世界は澄みきっているのではあるまいか。それにしても、この澄みきった時刻がこんなにかなしく心に沁(し)みるのはどうしたわけなのだろう……。

ふと、視線を窓の外の家屋の屋根にとめると、彼に

はこの街から少し離れたところにある自分の家の姿がすぐ眼に浮んできた。その家のなかでは容態のおもわしくない妻が今も寝床にいる。妻も今の今、何かうっとりと魅せられた世界のなかに呼吸づいているのだろうか。容態のおもわしくない妻は、もう長い間の病床生活の慣わしから、澄みきった世界のなかに呼吸づくことも身につけているようだった。だが、荒々しいものや、暴れ狂うものは、日毎その家の塀の外まで押し寄せていた。塀の内の小さな庭には、小さな防空壕のまわりに繁るままに繁った雑草や、朱く色づいた酸漿や、萩の枝についた小粒の花が、――それはその年も

季節があって夏の終ろうとすることを示していたが、——ひっそりと内側の世界のように静まっていた。それから、障子の内側には妻の病床をとりかこんで、見なれた調度や、小さな装飾品が、病人の神経を鎮めるような表情をもって静かに呼吸づいているのだ。——そうして、妻が病床にいるということだけが、現在彼の生きている世界のなかに、とにかく拠りどころを与えているようだった。

　彼の呼吸づいている外側の世界は、ぼんやりと魔ものの影に覆われてもの悲しく廻転しているのだった。週に一度、電車に乗って彼は東京まで出掛けて行くの

だが、人々の服装も表情も重苦しいものに満たされていた。その文化映画社に入社してまだ間もない彼には、そこの運転は漠然（ばくぜん）としかわからなかったが、ここでも何かもう追い詰められてゆくものの影があった。試写が終ると、演出課のルームで、だらだらと合評会がつづけられる。どの椅子からも、さまざまの言いまわしで何ごとかが論じられている。だが、それらは彼にとって、殆（ほとん）ど何のかかわりもないことのようだった。殆ど何のかかわりもない男が黙りこくって椅子に掛けている。その男の脳裏には、家に残した病妻と、それから、眼には見えないが、刻々に迫ってくる巨大な機

械力の流れが描かれていた。すると、ある日その演出課のルームでは何か浮々と話が弾(はず)んでいた。フランスではじまったマキ匪団(ひだん)の抵抗が一しきり華(はな)やかな話題となっていたのだ。——彼はその映画会社の瀟洒(しょうしゃ)な建物を出て、さびれた鋤道(すきみち)を歩いていると、日まわりの花が咲誇っていて、半裸体で遊んでいる子供の姿が目にとまる。まだ、日まわりの花はあって、子供もいる、と彼は目にとめて眺(なが)めた。都会の上に展(ひろ)がる夏空は嘘(うそ)のように明るい光線だった。虚妄(きょもう)の世界は彼が歩いて行くあちこちにあった。黒い迷彩を施されてネオンの取除かれた劇場街の狭い路(みち)を人々はぞろぞろ歩い

ている。

「大変なことになるだろうね、今に……」

彼と一緒に歩いている友は低い声で呟(つぶや)いた。と、それは無限の嘆きと恐怖のこもった声となって彼の耳に残った。

混みあう階段や混濁したホームをくぐり抜けて、彼を乗せた電車が青々とした野づらに、出ると、窓から吹込んでくる風も吻(ほっ)と爽(さわ)やかになる。だが、混濁した虚妄の世界は、やはり彼の脳裏にまつわりついていた。入社して彼に与えられた仕事は差当って書物を読み漁(あさ)ることだけだった。が、遽(にわ)か仕込(じこ)みに集積される朧気(おぼろげ)

な知識は焦点のない空白をさまよっていた。紙の上で学んだ機械の構造が、工場の組織が、技術の流れが……彼にはただ悪夢か何かのようにおもわれる。空白のなかを押進んでゆく機械力の流れ——それはやがて刻々に破滅にむかって突入している——その流れが、動揺する電車の床にも、彼の靴さきにも、ひびいてくるようだ。だが、電車を降りて彼の家の方へその露次を這入(はい)って行くと、疲労感とともに吻と何か甦(よみが)える別のものがある。それが何であるかは彼には分りすぎるぐらい分っていた。

家を一歩外にすれば、彼には殆ど絶え間なしに、ど

こかの片隅(かたすみ)で妻の神経が働きかけ追かけてくるような気がした。寝たままで動けない姿勢の彼女が何を考え、何を感じているのか、頻(しき)りと何かに祈っているらしい気配が、それがいつも彼の方へ伝わってくる。どうかすると、彼は生の圧迫に堪(た)えかねて、静かに死の岸に招かれたくなる。だが、そうした弱々しい神経の彼に、絶えず気をくばり励まそうとしているのは、寝たまま動けない妻であった。起きて動きまわっている彼の方がむしろ病人の心に似ていた。妻は彼が家の外の世界から身につけて戻って来る空気をすっかり吸集するのではないかとおもわれた。それから、彼が枕頭(ちんとう)で語る

言葉から、彼の読み漁っている本のなかの知織の輪郭まで感じとっているような気もした。

昨日も彼はリュックを肩にして、ある知りあいの農家のところまで茫々（ぼうぼう）とした野らを歩いていた。茫々とした草原に細い白い路が走っていて、真昼の静謐（せいひつ）はあたりの空気を麻痺（まひ）させているようだった。が、ふと彼の眼の四五米（メートル）彼方（かなた）で、杉の木が小さく揺らいだかとおもうと、そのまま根元からパタリと倒れた。気がつくと誰かがそれを鋸（のこぎり）で切倒していたのだが、今、青空を背景に斜に倒れてゆく静かな樹木の一瞬の姿は、フィルムの一齣（こま）ではないかとおもわれた。こんな、

ひっそりとした死……それは一瞬そのまま鮮(あざや)かに彼の感覚に残ったが、その一齣はそのまま家にいる妻の方に伝わっているのではないかとおもえた。……農家から頒(わ)けてもらったトマトは庭の防空壕(ぼうくうごう)の底に籠(かご)に入れて貯(たくわ)えられた。冷やりとする仄暗(ほのぐら)い地下におかれたトマトの赤い皮が、上から斜に洩(も)れてくる陽(ひ)の光のため彼の眼に泌みるようだった。すると、彼には寝床にいる妻にこの仄暗い場所の情景が透視できるのではないかしらとおもえた。

……生暖かい底に不思議な冷気を含んだ風がうっとりと何か現在を追憶させていた。彼はその街にある小

さな図書館に入って、ぼんやりと憩(いこ)うことが近頃の習慣となっていたのだ。

書物を閉じると、彼は窓際(まどぎわ)の椅子を離れて、受附のところへ歩いて行った。と、さきほどまで彼の頬に吹寄せていた生温かいが不思議に冷気を含んだ風の感触は消えていた。だが、何かわからないが彼のなかを貫いて行ったものは消えようとしなかった。閲覧室を出て、階段を下りて行きながらも、さきほどの風の感覚が彼のなかに残っていた。

それは沖から吹きよせてくる季節の信号なのだろうか。夏から秋へ移るひそかな 兆(きざし) なら彼は毎年見て

知っていた。だが、さきほどの風は、まるでこの地球より、もっと遙（はる）かなところから流れて来て、遙かなところへ流れてゆくもののようだった。その中に身を置いておれば、何の不安も苦悩もなく、静かに宇宙のなかに溶け去ることもできそうだ。だが、それにしても何かかなしく心に泌みるものがあるのはどうしたわけなのだろう。

（人間の心に爽やかなものが立ちかえってくるのだろうか。）もしかすると何か全く新しいものの訪れの前ぶれなのだろうか。……彼はまだ、さきほどの風の感触に思い惑いながら往来に出て行った。人通りの少な

い、こぢんまりした路は静かな光線のなかにあった。
煉瓦塀や小さな溝川や楓の樹などが落着いた陰翳を
もって、それは彼の記憶に残っている昔の郷里の街と
似かよってきた。

ほとんど総ての物から　感受への合図が来る。
向きを変える毎に　追憶を吹き起す風が来る。
何気なく見逃がして過ぎた一日が
やがて自分へのはっきりとした贈りものに成って
蘇る。

いつも頭に浮ぶリルケの詩の一節を繰返していた。

その春、その街の大学病院を退院して以来、自宅で養生をつづけるようになってからも、妻の容態はおもわしくなかった。夜ひどい咳(せき)の発作におそわれたり、衰弱は目に見えて著しかった。だが、彼の目には妻の「死」がどうしても、はっきりと目に見えて迫っては来なかった。その部屋一杯にこもっている病人の雰囲気(ふんいき)も、どうかすると彼には馴(な)れて安らかな空気のようにおもえた。と、夏が急に衰えて、秋の気配のただよう日がやって来た。その日、彼女の母親は東京へ用足し

に出掛けて行ったので、家の中は久しぶりに彼と妻の二人きりになっていた。

寝たままで動けない姿勢で、妻は彼の方を見上げた。と、彼もまた寝たままで動けない姿勢で、何ものかを見上げているような心持がするのだったが……。

「死んで行ってしまった方がいいのでしょう。こんなに長わずらいをしているよりか」

それは弱々しい冗談の調子を含みながら、彼の返事を待ちうけている真面目(まじめ)な顔つきであった。だが、彼には死んでゆく妻というものが、まだ容易に考えられなかった。四年前の発病以来、寝たり起きたりの療養

をつづけているその姿は、彼にとってはもう不変のもののようにさえ思えていたのだ。
「もとどおりの健康には戻れないかもしれないが、だが寝たり起きたり位の状態で、とにかく生きつづけていてもらいたいね」
それは彼にとって淡い慰めの言葉ではなかった。と妻の眼には吻と安心らしい翳りが拡(ひろが)った。
「お母さんもそれと同じことを云っていました」
今、家のうちはひっそりとして、庭さきには秋めいた陽光がチラついていた。そういう穏かな時刻なら、彼は昔から何度も巡(めぐ)りあっていた。だから、この屋根

の下の暮しが、いつかぷつりと截（た）ち切られる時のことは、それに脅かされながらも、どう想像していいのかわからなかった。

どうかすると妻の衰えた顔には微（かす）かながら活々（いきいき）とした閃（ひらめ）きが現れ、弱々しい声のなかに一つの弾（はず）みが含まれている。すると、彼は昔のあふれるばかりのものが蘇ってくるのを夢みるのだった。まだ元気だった頃、一緒に旅をしたことがある、あの旅に出かける前の快活な身のこなしが、どこかに潜んでいるようにおもえた。綺麗（きれいず）好きの妻のまわりには、自然にこまごましたものが居心地（いごこち）よく整えられていたし、夜具もシイツも

清潔な色を湛えていた。それらには長い病苦に耐えた時間の祈りがこもっているようだった。壁に掛けた小さな額縁には、蔦の絡んだバルコニーの上にくっきりと碧い空が覗いていた。それはいつか旅で見上げた碧空のように美しかった。

今にも降りだしそうな冷え冷えしたものが朝から空気のなかに顫えていた。電車の窓から見える泥海や野づらの調子が、ふと彼に昨年の秋を回想させるのだった。……一年前の秋、彼と妻の生活は二つに切離されていた。糖尿病を併発した妻は大学病院に入院したが、

これからはじまる新しい療養生活に悲壮な決意の姿をしていた。その時から孤独のきびしい世界が二人の眼の前に見えて来たようだった。彼は追詰められた気分のなかにも何か新しく心が研がれて澄んでゆくようだった。それは多少の甘え心地を含んだ世界ではあったが、ぼんやりと夢のような救いがどこかに佇んでいるのではないかと思えた。……熱にうるんだ妻の眼はベッドのなかでふるえていた。

「こないだ、三階から身投げした女がいるのです。あなたの病気は死ななきゃ治らないと云われて……」

冷え冷えとした内庭に面した病室の窓から向側の棟

をのぞむと、夕ぐれ近い乳白色の空気が硬(かた)い建物のまわりにおりて来て、内庭の柱の鈴蘭灯(すずらんとう)に、ほっと吐息のような灯がついていた。あのもの云わぬ灯の色は今でも彼の眼に残っているのだったが……。

だが、彼はつい先日その大学病院を訪(たず)ねて行って大先生に来診を求めたときの情景がまざまざと甦ってくる。看護婦が持って来た四五枚のレントゲン写真を手にして眺め入ったまま、大先生は暫(しばら)く何も語らない。それから妻の入院中の診断書類を早目に一読していたが、

「それでは今日の夕方お伺いしましょう」と彼に来診

を約束した。それから、大先生が来るということは彼の妻にとっては大変な期待となった。妻はわざわざ新しい寝巻に着替えて約束の時刻を待っている。彼は家の外に出て俥(くるま)の姿を待った。冷えて降りだしそうな暗い空に五位鷺(ごいさぎ)が叫んでとおりすぎる。そうして待ち佗(わ)びていると、ふと彼は遠い頼(たよ)りない子供の心に陥落されていた。俥がやって来たのは彼が待ち佗びて家に戻って来た後だった。大先生は妻の枕頭に坐って、丁寧に診察をつづける。羽毛をとりだして病人の足の裏を撫(な)でてみたり、ものなれた慎重な身振りだったが、鞄(かばん)から紙片をとり出すと、すらすらと処方箋(しょほうせん)を書いた。

「二週間分の処方をしておきますから、当分これを飲みつづけて下さい」

そうして、大先生は黙々と忙しそうに立上る。彼が後を迫って家の外に出ると、既に俥は走りだしている。それは何か熱いものが通過した後のようにぐったりした心地だった。さきほどまで気の張りつめていたらしい妻も、ひどく悲しく疲れ顔で押し黙っている。さきほど用意したまま出しそびれていた蜜柑（みかん）の罐詰（かんづめ）が彼の目にとまった。それを皿に盛って妻の枕頭に置くと、「ああ、おいしい」妻は寝たまま、まるで心の渇（かわ）きまで医（いや）されるように、それを素直にうけとる。侘しく暗

い気分のなかに、ふと蜜柑の色だけが吻と明るく浮んでいるのだった。……だが、その翌日彼が街に出て処方箋どおり求めて来た散薬は、もう妻の口にまるで喜びを与えなかった。何かはっきりしないが、眼に見えて衰えてゆくものがあった。気疎そうな顔つきで、妻はぼんやりと焦点のさだまらぬ眼つきをしている。あの弱々しい眼のなかから、パッと一つの明るいものが浮びあがったら……彼は電車の片隅でぼんやりと思い耽っていた。

今にも降りだしそうな冷え冷えしたものは、そのまま持ちつづいて、街も人も影のように薄暗かった。家

を出てから続いている時間が今でも彼には不安な容態そのもののようにおもえた。映画会社の廊下を廻り演出課のルームに入っても、彼は影のように壁際(かべぎわ)に佇(たたず)んでいた。

「奥さんの病気はどうかね」と友人が話しかけて来た。「よくない」彼はぽつんと答えた。こんな会話をするようになったのかと、ふと彼には重苦しく愁わしいものがつけ加えられるようだった。

冷え冷えとしたものは絶えずみうちに顫えてくるようだったが、試写室に入ると、いつものように巨大な機械力の流れが眼の前にあった。フィルムの放つ銀色

の影も速度も音響もその構成する意味も、彼にはただ、やがて破滅の世界にむかって突入している奔流のように無気味におもえた。だが、無数の無表情のなかに、ふと心惹かれる悲しげな顔が見えてくることもある。ふと、その時、試写室の扉が開いて廊下の方から誰か呼出しの声がした。瞬間、彼はハッと自分の名が呼ばれたのではないかと惑った。……試写が終ってドカドカと明るい廊下の方へ人々が散じると、重苦しい魔ものの影の姿も移動する。狭い演出課のルームの椅子は一杯になり議論が始るのだった。だが、こうして、こんな場所に彼が今生きていることは、まるで何かの間

違いのようにおもえてくる。今は魘されるような感覚ばかりが彼をとりまいているのだった。刻々にふるえる佗しいものが会社を出て舗道を歩きながらも、彼に附きまとっていた。混みあう電車に揺られながら、彼はじっと何か悲痛なものに堪えている心境だった。だが、電車が広漠とした野を走りつづけ、見馴れた芋畑や崖の叢が窓の外に見えて来たとき、外はしきりに雨が降りつづいていた。まるで、それは堪えかねて、ついに泣き崩れてしまったものの姿だ。こんなにも悲しい、こんなにも悲しいのか、……何が？　冷え冷えとした真暗な底に突落されてゆく感覚が彼の身うちに

喰込（くいこ）んで来る。こんなにも悲しい、こんなにも悲しいのか、何が……？　この訳のわからぬ感傷は今かぎりのものなのだろうか、やがて別の日が訪れてくれば消え失せてしまうのだろうか……ぼんやりと彼がおもい惑っていると、ぼっと電灯がついて車内は明るくなった。と、灯のついている彼の家の姿が、びしょ濡（ぬ）れの闇（やみ）のなかにもすぐ描かれた。

「お母さん、お母さん」

今、目ざめたばかりの彼はふと隣室で妻のかすかな声をきくと、寝床を出て台所の方にいる母親に声をか

けた。それから、その弱々しいなかにも何か訴えを含んでいる声にひきつけられて、彼は妻の枕頭にそっと近寄ってみた。妻の顔は昨夜からひきつづいている不機嫌な苛々したものを湛えていた。だが、それは故意にそうしている顔ではなく、何かもう外界の空気に堪えられなくなり、外界から拒否されたものの姿らしかった。瞼はだるそうに窄められ、そこから細く覗いている眸はぼんやりと力なく何ものかを怨じていた。

……一週間前に、妻は小さな手帳に鉛筆で遺書を認めていた。枕頭に置かれていたので彼も読んでそ

れは知っていた。けれども、それを認めた妻も読んだ彼も、ほんとうに別離が切迫したものとはまだ信じきれないようだったのだ。

昨日の夕方、電車を降りて彼が暗い雨のなかを急込(せきこ)んで戻ってくると、家には灯のついた病室が待っていた。彼は妻の枕頭に屈(かが)んで「どうだったか」と訊(たず)ねた。

「今日は気分も軽かったのに、お母さんがひとりでおろおろされるので何か苛々しました」

枕頭に食べさしの林檎(りんご)が置いてあった。林檎が届いたら、と長い間持ち望んでいたのだが、注文の荷が届いたときには、これはもう彼女の口にあわなくなって

いたのだ。ふと、妻は指の爪で唇の薄皮をむしりとろうとした。

「どうしてそんなことをするのだ」

「…………」妻は無言で唇の皮を引裂いた。

……今、朝の光線で見ると、昨夜傷けた唇はひどく痛々しそうだった。やがて、母親が食膳を運んでくると妻は普段のように箸をとった。だが、忽ち悲しげに顔を顰めた。それから、つらそうに無理強いに食事をつづけようとした。殆ど何かにとり縋るようにしながら悶え苦しんで食事を摂ろうとする姿は見るに堪えなかった。これははじめて見る異様な姿だった。

それから重苦しい時間が過ぎて行った。昼の食事は母親がいくらすすめても遂(つい)に摂ろうとしなかった。日が暮れるに随(したが)って、時間は小刻みに顫えながら過ぎて行った。

夕食の用意が出来て枕頭に置かれた。が、妻は母親のすすめる食事を厭(いと)うように、わずかに二箸ばかり手をつけるだけだった。電灯のあかりの下に、すべてが薄暗くふるえていた。食後の散薬を呑(の)んだかとおもうと、間もなく妻は吐気を催して苦しみだした。今、目には見えないが針のようなものがこの部屋のなかに降りそそいでくるようだった。

……ずっと以前から彼も妻も「死」についてはお互によく不思議そうな嘆きをもって話しあっていた。人間の最後の意識が杜絶(とだ)える瞬間のことを殆ど目の前に見るように想像さえしていた。少女の頃、一度危篤に瀕(ひん)したことのある妻は、その時見た数限りない花の幻の美しかったことをよく話した。それから妻は入院中の体験から死んでゆく人のうめき声も知っていた。それは、まるで可哀相(かわいそう)な動物が夢でうなされているような声だ、と妻は云っていた。彼も「死」の幻影には絶えず脅かされていた。が、今の今、眼の前に苦しみだしている妻が死に吹き攫(さら)われてゆくのかどうか、彼に

はまだわからなかった。「死」が彼よりさきに妻のなかを通過してゆくとは、昔から殆ど信じられないことだったのだ。だが、たとえ今「死」が妻に訪れて来たとしても、眼の前にある苦しみの彼方(かなた)に妻はもう一つ別の美しい死を招きよせるかもしれない。それは日頃から彼女の底にうっすらと感じられるものだった。彼も今、最も美しいものの訪れを烈(はげ)しく祈った。……‥

　胃にはもう何も残っていそうもないのに、妻はまだ苦しみつづけた。これはまるで訳のわからぬことだった。

「よく腹を立てるから腹にしこりが出来たのかな」彼はふと冗談を云っていた。

「この頃ちょっとも腹は立てなかったのに」と妻は真面目(まじめ)そうに応(こた)えた。そのうちに、妻は口の渇(かわ)きを訴えて、氷を欲しがった。隣室で母親は彼に小声で云った。

「もう唾液(だえき)がなくなったのでしょう」

それから母親は近所で氷の塊(かたま)りを頒(わ)けてもらって来た。氷があったので彼は吻(ほっ)と救われたような気がした。氷は硝子(ガラス)の器から妻の唇を潤おした。うとうとと眼を閉じたまま妻の痛みはいくらか落着いてくるよう

だった。
夜はもう更(ふ)けていた。彼は別室に退いて横臥(おうが)していた。が、暫くすると母親に声をかけられた。
「お腹(なか)を撫(な)でてやって下さい。あなたに撫でてもらいたいと云っています」
彼は妻の体に指さきで触れながら、苦しみに揉(も)まれてゆくような気がした。妻の苦しみは少し鎮(しず)まっては、また新しく始って行った。彼は茫(ぼう)とした心のなかに、熱い熱い疼(うず)きがあった。これが最後なのだろうか。それなら……。だが、今となってはもう妻にむかって改めてこの世の別れの言葉は切りだせそうもなかった。

言い残すかもしれない無数のおもいは彼のなかに脈打っていた。妻はまた氷を欲しがった。それからまた吐き気を催し、ぐったりとしていた。

「もう少しすれば夜が明けるよ」

かたわらに横臥して、そんなさりげないことを話しかけると、妻は静かに頷く。そうしていると、まだ妻に救いが訪れてくるようで、もう長い長い間、二人はそんな救いを待ちつづけていたような気もした。そして、これは彼等の穏やかな日常生活の一ときに還ってゆくようでさえあった。だが、ふと吃驚したように妻は胸のあたりの苦しみを訴えだした。その声は今迄の

声とひどく異っていた。それは魔にうなされたように、哀切な声になってゆく。愕然として、彼も今その声にうなされているようだった。病苦が今この家全体を襲いゆさぶっているのだ。

彼が玄関を出ると、外は仄暗い夜明だった。どこの家もまだ戸を鎖していたが、町医のベルを押すと、灯がついて戸は開いた。医者は後からすぐ行くことを約束した。

家に戻って来ると、妻の苦悶はまだ続いていた。「つらいわ、つらいわ」と、とぎれとぎれに声は波打つようだった。彼はその脇に横臥するようにして声をかけ

た。

「外はまだ薄暗かったよ。医者はすぐ来ると云っていた」

　妻は苦しみながらも頷いていた。妻が幼かったとき一度危篤に陥って、幻にみたという美しい花々のことがふと彼の念頭に浮んだ。

「しっかりしてくれ。すぐ医者はやってくるよ。ね、今度もう一度君の郷里へ行ってみよう」

　妻はぼんやり頷いた。玄関の戸が開いて医者がやって来た。医者の来たことを知ると、妻は更に辛（つ）らそうに喘（あえ）いで訴えた。

「先生、助けて、助けて下さい」

医者は静かに聴診器を置くと、注射の用意をした。

その注射が済むと、医者は彼を玄関の外に誘った。

「危篤です。知らすところへ電報を打ったらどうです」

医者はとっとと立去った。彼は妻の枕頭に引返した。

妻はまだ苦悶をつづけていた。

「どうだ、少しは楽になったか」

妻は眼を閉じて嬰児（えいじ）のように頭を左右に振っていた。

暫くすると、さきほどから続いていた声の調子がふと変って来た。

「あ、迅(はや)い、迅い、星……」

少女のような声はただそれきりで杜切(とぎ)れた。それから昏睡(こんすい)状態とうめき声がつづいた。もう何を云いかけても妻は応えないのであった。

彼は急いで街へ出て、郷里の方へ電報を打っておいた。急いで家に戻って来ると、玄関のところで、まだ妻のうめき声がつづいているのを耳にした。その瞬間、今はそのうめき声がつづいていることだけが彼の唯一のたよりのようにおもえた。

彼は妻の枕頭に坐ったまま、いつまでも凝としていた。時間は過ぎて行き、庭の方に朝の陽(ひ)が射(さ)して来た。

あたりの家々からも物音や人声がして、その日は外界はいつもと変りない姿であった。昏睡のままうめき声をつづけている妻に「死」が通過しているのだろうか。いつかは、妻とそのことについてお互に話しあえそうな気もした。だが、妻のうめき声はだんだん衰えて行った。やがて、その声は一ぅねり高まったかと思うと、息は杜絶えていた。

（昭和二十五年四月号『群像』）

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社
　　１９７３（昭和48）年７月30日初版発行
入力：tatsuki
校正：林　幸雄
２００２年１月１日公開
２００５年11月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。